

## 胎子から新生子へ

静内診療所 井上 哲

平成4年 北里大学卒業

同年NOSAI日高（現NOSAIみなみ）入社

令和2年2月より日高軽種馬農協勤務

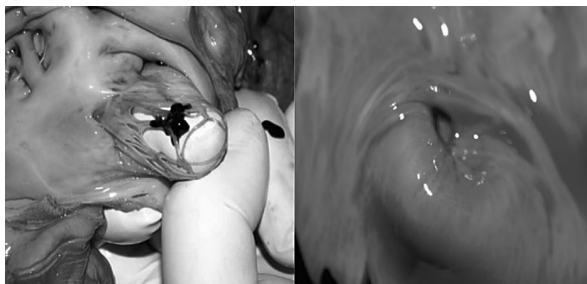
今年もお産シーズンを迎え、気が休まらない日々を過ごされていることと存じます。今回は、子馬がこの世に解き放たれる瞬間、体の中で起きている変化についてお話しさせていただきます。下の写真は、胎子期の肺と心臓です。当然ながら肺は含気しておらず（写真1）、心臓には二つの穴（正確には卵円孔と動脈管）が開いています（写真2）。これらは、子宮内で羊水中に浮かんでいる胎子が発育する上で必要な形態で、胎子循環と呼ばれます。

そしていざ、トンネル（産道）をくぐり抜け外界へと飛び出した胎子は、一瞬にして新生子とし

写真1 胎子期の肺



写真2 卵円孔(左)と動脈管(右)



て生きていくために必要な機能を獲得しなければなりません。すなわち、肺はスポンジの様に空気をたっぷりと含む組織に変わり、血流を必要としなくなった心臓の穴は閉じていきます。こうして、今までは臍の緒（胎盤）に頼っていた血液（酸素）供給を自らの心肺で行うようになるのです。そこで大切になるのが、いかにスムーズに胎子から新生子に変身させてあげるかです。答えは簡単なようで最も難しいことですが、分娩時に人間があまり手を出しすぎないことです。破水（一時破水）後、正常な胎位を確認したらできるだけ自然に任せましょう。結果、胎子は最適な時間をかけて産道を通過することにより、新生子に変身するために必要なある種のホルモンを分泌します。また、臍は適度な時間をかけて、適切な部位で自然に切れることで新生子側に十分な量の血液と酸素を送り込みます。言わば母から子への大切な贈り物によって肺は膨らみ、心臓の穴は塞がります。（写真3）。

この神秘的ともいえるお産を温かくかつ冷静に見守ることは、皆様にとってもまた我々獣医師にとっても、繁殖シーズンの永遠のテーマと言えるでしょう。なお、分娩についての詳細は、2017年4月のよもやま話で池田獣医師が執筆していますので今一度ご覧になって下さい。

写真3 閉じた卵円孔(左)と動脈管(右)

